



### 『鳥類の人工孵化と育雛』

原書：Gage LJ, Duerr RS ed./Hand-Rearing Birds

2007年, Blackwell Publ. 刊

翻訳：山崎 亨 監訳, 2009年, 文永堂出版刊

浅川満彦 (酪農学園大学)

本書は2007年に米国で刊行された『Hand-Rearing Birds』の翻訳本で、北米大陸（メキシコ以北）に生息する野生種と別の地域が原産地である飼育種を対象に、人工孵化、育雛、繁殖および飼育時の健康管理について著されたテキストである。これら鳥類の雛・幼鳥が傷病救護として入院した場合、あるいは動物園で展示されている場合、さらに、あるいは域外保全として飼育下で繁殖された場合の事例が含まれている。このように多様な局面で、多くの種を対象とした個別経験が、学問として体系的に見事に結集されているのがこの本の特徴である。

原書著者35名は、もちろん、鳥類学の専門家（公立あるいは私立の動物園および野生動物保護センターなどの飼育者、愛玩鳥診療の獣医師や看護師、野生動物リハビリテーター、鳥類生態学者などの研究者など）であるが、いずれもこれらの局面を実際に経験してきた方達である。ちなみに、うち28名が女性という比率は、野生動物医学分野における世界基準を反映しているであろう。

38章からなる本文構成は、最初の3章が「基本的なケア」・「雛の識別および孵卵」の共通項目からなる総論的な内容である。特

に、有益な情報は、ほとんどの目 (order) を網羅した雛の識別法の一覧 (「表 2-1」とされたもの) である。この表は、孵化時での雛の行動特性である晩成・早成性およびその中間型である半晩成・半早成性に区分し (大部分の種では虹彩の色や行動様式の特徴併記)、それぞれの足の形態 (足趾パターン、脚色など)、体重、外皮と綿羽、口 (口腔の色、嘴および上下嘴の継ぎ目、鼻孔、卵歯など)、鳴き声が確認された種とその所属する目が記載されたものである。もちろん、ある 1 つの種が当該分類目すべてをカバーするものではないが、種を類推する上で、有益である。北米大陸には約 810 種の在来鳥類が知られるがここには 50 種 (6% 強) が記載されていた。約 550 種が知られる日本ではどの程度なのであるか。戦前発行された鳥類飼育に関する書籍はかなり充実したものもあるが、この詳細な内容には及ばないであろう。また、スズメ目 (23 種) については、口腔内の色別 (「ピンクから赤」と「黄色からオレンジ」) で信じられないほど詳細な一覧表 (「表 2-2 と 2-3」とされたもの) が掲載されている。にも関わらず、このような活動で不可欠なのは、結局、科学ではなく実践と、それにより得られた実践者の「独自の知識体系」に依拠するしかないと、この章の結語で述べられていた。実際、これら一連の表に掲載された情報は、救護関連団体により長年蓄積されたものであることが窺われた。しかし、おそらく、このようなデータは日本の関連団体でも蓄積されているはずである。これに準ずるような日本産種についても、長年の経験によって蓄積された情報が公表されることを期待したい。

総論に続く後半部分が鳥類グループ (分類目あるいは科レベル) ごとの各論である。気になったのは、その各論におけるグループの序列 (規則性) がよく判らなかつたことである。もちろん、致命的なものではない。が、専門職教育の体系を構築するような場面ではこういったことが気になるものである (誰だ「だから大学のセンスはダメだ」といったのは)。Sibley が随所で引用されるのだが、少なくとも、彼のあの系統は、案外、不人気なのかも知れないと勘ぐらせたことは事実である。各論での共通的な記載事項は、生物学的特徴、人工育雛への移行、人工孵化、育雛初期のケア、罹患しやすい疾病と対処法、餌の種類 (雛の状態、すなわち孵化直後、巣内、巣立ちなどに分け記述)、給餌法、期待される体重増加、飼育環境 (これも雛の状態別に記述)、放鳥の準備、関連製品の連絡先、参考文献 (資料) などである。獣医療などに関わるものが、その日常業務の一環で傷病野生動物の救護に関わらざるを得ない場合は多い。そして、救護活動で持ち込まれる大半は鳥類なので、その最低限の生物学的特徴 (形態、分類、生態、

行動など) と疾病・診療およびケアに関する技術が必要となる (中津, 2008)。本書、特に総論はそのような場面で有効に活用されるはずである。各論も北米仕様ではあるが、十分、日本産の種でも読替可能であろう。

が、本書が活用される場合は、臨床家の実際面だけのものではない。獣医師国家試験に課されていない分野までを扱う余裕がない大学で、その正規課程に鳥類医学は皆無である。今後も、この資格試験のところをクリアしなければ齊一教育としては不可能である。たとえ、大きな診療報酬が予想される愛玩鳥医療分野でも然りである。もし、その分野を目指すのなら鳥類臨床研究会 (会長海老沢和荘先生) などに所属し、会員相互でその技量を磨くのであろう。評者も寄生虫症のアドバイザーとしてこの研究集会に参加させて頂き、最新情報を得る好機としているのと同時に、獣医大学での最低限の鳥類医学項目の教育付与は不可欠と再確認させる。獣医学には多様な生物を対象にした生物科学という側面があるがゆえ、何でも取り込む懐の深さがあるが、専門職大学院含む大学での教育への加工には一定の制限が前提となる。すなわち、必要最低限項目の選定である。本書はそのような項目の宝庫であり、選定作業中のにわか野生動物医にとって、きわめて有用な書であることも付記しておきたい。

## 引用文献

1. 中津 賞. 2008. 診療に携わる中で最近思うこと. 日獣会誌. 61: 189-190.